

スリランカの初等中等情報教育

和田 勉

長野大学

スリランカ訪問から (続)

2018年3月、辰己丈夫先生(放送大学)と筆者、およびこのとき筆者が指導していた同国出身の留学生とでスリランカ(スリランカ民主社会主義共和国:旧名セイロン)を訪問し、政府の教育省(Ministry of Education) (図-1) およびいくつかの大学および初等中等教育機関を訪問した。このうち、いくつかの学校への訪問を中心とした報告はすでに記した¹⁾。本稿はその続編であり、教育省に訪問して同省の担当者にインタビューしたことを中心に、University of Sri Jayawardenepuraにおいて同大学の先生方からお聞きしたことを交え、同国の情報教育を中心として、筆者が理解したところを記す。なお文献1)、2)に述べたことは重ねて述べないので、これらをお読みいただきたい。



図-1 スリランカ政府教育省

スリランカの情報教育と試験の制度^{3), 4)}

スリランカの初等中等教育での学年は Grade1 から始まる通し番号で呼ばれ、以下の学校種に区別されている(表-1)。

Junior Secondary から Collegiate まだが中等教育(Secondary)であり、大学(University)へはそれを終えて進学する。義務教育は Junior Secondary までであるが、Senior Secondary までは学ぶことが教育省により強く勧められている⁴⁾(文献4)では「GCE O/L (Ordinary Level: 後述) までは」と記されている)。

日本の初等中等教育の制度では、まず学習指導要領があり、それに則っての学校教育があり、それに則る形で高校入試や大学入試の制度・試験内容が設定されている。それに対して同国では逆に、まず、Grade を進むにつれて受ける試験の枠組みがあり、それに対応するように教育課程の枠組みと内容が規定されているようである。同国の教育の枠組み全体は英国と共通点が多く、これはスリランカが以

表-1 学校種およびそれぞれに含まれる Grade と年齢

学校種	含まれる Grade の範囲	各 Grade の児童生徒の年齢
Primary	Grade 1 ~	5-6 才 ~
	Grade 5	9-10 才
Junior Secondary	Grade 6 ~	10-11 才 ~
	Grade 9	13-14 才
Senior Secondary	Grade 10 ~	14-15 才 ~
	Grade 11	15-16 才
Collegiate	Grade 12 ~	16-18 才 ~
	Grade 13	17-19 才

前は英領セイロンでありまた現在もイギリス連邦 (Commonwealth of Nations) の一員であるなど、歴史的に英国との関係が深いことが関係していると思われる^{4), 5)}。

教育省および University of Sri Jayewardenepura でのインタビューの際に各学校種における教育制度をいろいろ質問したが、日本のように「小学校段階では何々を教えており、中学校段階では何々を……」という答えはなかなか得られず、得られたのは「各試験 (後述) のこれこれに対応した科目としてはこれこれがある」という回答ばかりだった (図-2, 図-3)。

児童生徒は、学年を進むにしたがって以下の情報分野に関する試験を受ける⁴⁾：

- Senior Secondary の Grade 10 または 11 には GCE (General Certificate of Education, 一般教育修了証明) の O/L (Ordinary Level, 普通段階) の試験がある。いくつかの科目から選択して受験するようになっているが、この中にいくつかの教科の内容が合わさった Basket Subject の試験があり、この中に情報 (IT) 分野が含まれている。
- また Grade 12 には GIT (General IT) の試験があり、これは当該年度の生徒全員が受けるものである。GIT とは、生徒がその専門分野にかかわらず皆受ける試験であり、専門的な深い内容のものとは区別されている。
- さらに Grade12 または 13 には A/L (Advanced

Level, 上級段階) の試験もある。A/L 試験は多くの科目から選択して受験するようになっており、その中に情報関係の科目が 2 科目ある。

初等中等教育の学校は、学校種ごとに独立して設置されているのではなく、小学校相当から高等学校あるいは短期大学相当の学年までが 1 つのまとまった学校として設置されている。初等中等教育の学校は以下の 3 タイプに分かれる³⁾。

- Type1AB Grade1 から 13 までが設置されている学校 (1A, 1B でなく 1AB と呼ばれる.)
 - Type1C 1AB と同様だが A/L の科学分野は扱っていない学校
 - Type2 Grade1 から 11 まで、または 6 から 11 までが設置されている学校
 - Type3 Grade1 から 5 までが設置されている学校
- これらをあわせ、全土で約 10,000 校の学校があるが、そのうちの約 4,000 校で情報 (IT) の授業を必修として行っている。

A/L 試験に対応して、すべての分野をあわせ、シンハラ語で 53, タミル語で 53, 英語で 10 ~ 12 の授業が設けられ、生徒はそのうち 3 つを選択する。そのうちの情報 (IT) の授業は、科学系 (Science stream), 芸術系 (Art stream), 共通系 (Common stream), 技術系 (Technology stream), およびさまざまな分野から選択できる共通カリキュラム (Common curriculum) に分けられる。



図-2 University of Sri Jayewardenepura



図-3 University of Sri Jayewardenepura の先生方へのインタビュー、手前は筆者らと同行した同国出身の留学生



大学 (University) 進学を希望する生徒はこれらを学んだ上で A/L 試験を受験する。大学に進む生徒のうち約 20% が情報分野専門の学部学科に進学する。

教員養成・教師教育

初等中等教員の資格として、我が国の教員免許に相当するような、統一された制度はないようで、教員養成は 17 カ所の教育機関で行われている。教員の研修は、NIE (National Institute of Education, 国立教育研究所) が中心になって行われており、それ以外にもいくつかの機関で行われている。

教育事情雑感

ここでは、インタビュー中に聞きだした印象深いことに関して順不同に述べる。

教育省でのインタビューで、日本では常に問題となる以下のことを問いかけてみた：

「日本では初等中等教育に関し『自分は(うちの子は)将来情報技術の職業に就くつもりはない。それなのになぜ情報分野を学ばなければいけないのか』という声が多く困っている。貴国ではどうか？」

返ってきた答えは「初等中等教育では情報分野のうち一般的 (general) なことを学ばせているのでそういう問題はない。職業教育は中等教育のあとで(それを専門として選ぶ者だけに)教えている。これ

は良い方法だ」であった。国情がまったく違い、日本でこのような声上がること自体、よく理解できないようだった。

同国での情報教育に関する問題は、上記のようなことではなく、多くの学校(特に都市部以外)で情報機器やネット設備の整備が不十分であることのことであった。前述の、約 10,000 校の初等中等教育学校のうち約 6,000 校で情報分野の授業が行われていないのは、設備面の事情から実施が困難なためであり、行われている 4,000 校の中でも高速インターネット接続(ADSL や光接続)があるのは約 2,500 校とのことだった。情報教育に関する苦情といえま

ずはこの設備面(それにより情報教育が行えていないこと)に関することであり、政府はなによりもこの設備面での改良を目指しているとのことであった。

教育省でのインタビューでは、以下のことも聞いてみた：

「貴国では、高度な情報技術を身につけてプログラマや IT エンジニアになれば、社会的に尊敬され高収入も得られる、と想像するが、これは正しいか？」

答えは明確に「そのとおり」であった。スリランカに限らず、過去に筆者が訪れたいくつかの国、特に先進国とは呼ばれていない国では、すべて共通してこれが「そのとおり」であった。というよりむしろ、それらの国ではこんなことは議論するまでもなく当然のこととして、教える側だけでなく学ぶ多くの児



図-4 小中高等学校(女子校) Vishaka Balika Vidyalaya, Sapugaskanda, 文献1)参照

童生徒学生も当たり前で認識しており、だからこそ努力して学んでいる。問題はそんなことではなく、それに向かうための手段すなわち設備であったり教育体制の問題であったり、である。

情報教育に限らないのだろうが、スリランカに限らず過去に見学などで訪れた諸外国に関する知識から、振り返って我が国を見ると、何かが根本的に異なる。多くの学生・生徒が「学びたい、それによりより「上」を目指したい」と考えている・それが当然である国々と比較して、我が国は、学ぶことに意味を見出していない学生・生徒が多く、教える側・その枠組みを用意する側が「学びたくないのになぜ強制するのか？」という苦情に日常的に相対するまるで次元の異なる世界になっていることを繰り返し感ずる。



図-5 最大都市 Colombo の風景



図-6 首都 Sri Jayawardenepura Kotte のレストラン

□ スリランカの街中

訪問で見た街中を写真3枚で紹介する。最大都市は Colombo だが首都は Sri Jayawardenepura Kotte である。といっても Colombo との間は市街が連続している (図-5, 図-6)。図-5に見える特異なデザインの高層ビルや塔 (Lotus Tower) は訪問時はまだ建築中であった。図-7は街中にたくさん走っている三輪タクシーで、タイのトゥクトゥクなどと似ているがスリランカでは Three-Wheeler などと呼ばれる。

参考文献

- 1) 和田 勉: スリランカの学校訪問記, 情報処理, Vol.61, No.4, pp.393-396 (Apr. 2020).
- 2) エディリシンハチャトリカ, 和田 勉: スリランカの初等中等・一般情報教育と情報入試・検定, 情報処理学会 コンピュータと教育研究会 144 回研究発表会, 2018 (平成 30) 年 3 月 17 日 (土), Vol.2018-CE-144 No.13, pp.1-5.
- 3) Ministry of Education - Sri Lanka "School Census Report - 2017, http://www.statistics.gov.lk/education/School%20Census%20Report_2017.pdf
- 4) Wikipedia 英語版: Education in Sri Lanka, 2020 年 3 月 30 日閲覧.
- 5) Wikipedia 日本語版: イギリス連邦, 2020 年 4 月 30 日閲覧.

(2020 年 4 月 6 日受付)

和田 勉 (正会員) wadaben@acm.org

長野大学企業情報学部教授。前本会初等中等教育委員会委員長。本会シニア会員、学会活動貢献賞受賞。2006 年大韓民国高麗大学師範学部コンピュータ教育学科招聘教授。1978 年早稲田大学理工学部電気工学科卒業、1983 年筑波大学大学院数学研究科単位取得満期退学。



図-7 三輪タクシー

